

2019 年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞受賞

新幹線ナタ殺傷事件から辿る現代社会の様相

法学部1年 天野 大輝

新幹線ナタ殺傷事件から辿る現代社会の様相

1. はじめに

新幹線内における無差別殺傷事件という前代未聞の事柄に、「走る密室」として日本中の人々が震撼した「新幹線ナタ殺傷事件」。そのようなセンセーショナルな無差別殺人事件が如何に発生するのかを詳細に解明することから当論文は出発する。そしてその行きつく先は、社会的孤立及び障がい者差別という「社会の矛盾」であった。当論文は、いま社会問題化しているそのような問題がどのように生じ、どのような結果をもたらすのか——そのような疑問に収束し、より現実の状態に即した障がい者への社会的対応を実践するための方途を探る研究に示唆を与える。

2. 事件の概要

2018年6月9日、「新幹線ナタ殺傷事件」が生じた。この事件は、新横浜—小田原間を走行していた東海道新幹線の最終便「のぞみ 265 号」の車内で起こった無差別殺人事件である。朝日新聞の調査によると、小島一郎被告は、車内において両隣の女性2人を襲い怪我を負わせ、その後女性をかばいに入った男性1人を殺傷した。平安な日常を享受する人々を突如として不安に陥らせる痛ましい事件——それが生じるプロセスというのはどのようなものなのだろうか。そしてなぜそれは過去に幾度も生じてきたのだろうか。

3. 容疑者の特性および周囲との対人関係

同報道に基づくと被告は犯行前から両親と疎遠関係にあり、絶縁状態が続いていたという。絶縁状態に陥らせた最大の要因は親子間の喧嘩であった。その際、小島一郎は両親に刃をむけたという。また、被告は職場内において人間関係を円滑に構築することができず、それが原因で退社することになった。

4. 職場内における孤立とその要因

では、なぜ職場内での不和と孤立状態が生じたのだろうか。このような人間関係に至った原因のひとつとして、生来のアスペルガー症候群が関係している。アスペルガー症候群の診断は、表1の項目群に基づいて行われる。

この議論を展開する前に断るべきこととして、表1は診断基準にすぎないという点が挙げられる。すなわち、表1に記載されている基準は暫定的なものであり、そのすべてがアスペルガー症候群を有する人に当てはまるというわけではない。また、「サリーとアンの課題」(注1)を解けても「ジョンとメアリーの課題」(注2)を解けないというように、患者間においてもその症状の程度においても差異がみられる。このようなことを考慮した上で、議論を以下に展開していく。

さて、表1の第1項に「対人的交流の障害」がある。生来アスペルガー症候群を有する人

は「社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応」を行うことが困難だとされている。この行為とは、「他者が何を考え、どんな期待や信念をもっているかなどの理解に応じて行動し、思考する能力」に基づいて行われるものである。「心の理論」と呼ばれるこの能力が欠如しているために、会話が成立しなかったり、他者によって共感能力に乏しいと判断されたりし、その結果として他者と親密な関係性を築くことができなくなるのだ。

また、表1の第4項の「脅迫的な興味の持ち方」や第5項の「型にはまった行動パターン」といったものは、一般に自閉症者が物事の変化や多義性に敏感であり、そこから多くのストレスを発生させてしまうことから生じる特性だと考えられている。そのことを考慮すると、労働市場のなかに放り出された自閉症者にとって、生産加工における様々な段階の作業工程を一つの空間でとり行う近代以降の工場という場は、非常に居心地の悪いところであり、彼らにとってそのような場で作業を行うこと自体が精神的に困難である。

対人的交流の障害				
・親密な友人がいない				
・友人を作ることに関心がない。				
・いつも一人である。				
すべてではないが、拒絶的な近づき方をした結果のことが多い。				
・共感や思いやりに乏しい。他者の感情が理解できない。				
非言語的なコミュニケーションの特徴				
・表情、視線、ジェスチャー、姿勢などの表現が乏しい。				
あるいは独特で不適切な表現をする。				
・対人関係の手がかりを理解できない。				
言語の特異性				
・表面的には完全な表出言語を有する。				
・ペダンティックな独特の言い回しを頻用する。				
・字義通りの言語理解をし、言外の意味は理解が難しい。				
・音声の韻律が不適切である。一本調子の声、反対に芝居がかった声色など。				
狭い独特な興味、関心事				
・興味の対象が特異的であるか、またはその興味の持ち方が強迫的である。				
・物の収集や事実の記憶と関連することが多い。				
型にはまった行動パターン				
・生活のさまざまな場面で型にはまった行動パターンがみられる。				
運動の不器用さ				
常識のなさ				
・社会的慣習にしたがってふるまうことができない。				

出典：中根晃（2000）P. 69 より筆者作成

このように、自閉症者にとって、労働の場とは辛苦極まりない場であり、それが原因で健常者と同様の作業パフォーマンスを発揮できなかつたり、あるいはそれ自体が原因となって、すなわち人間関係を円滑に構築する要素が欠落しているが故に他の労働者との親密な関係性を築けなかつたりするのだ。自閉症者、なかんずくアスペルガー症候群を有する者は、その障がいをもっていることを周囲の他者が知らないまま、共同作業に従事することが多い。この障がいは、社会という空間が出現することで初めて症状が〈顕在化〉するものであり、また障がいをもっているという事実を耳にすることで初めて症状を〈発見〉することが可能になるものだからだ。そのため、自閉症者に対して「あいつはコミュニケーション能力に欠ける」などの非難を無理解であるが故にしてしまう例は多く見られる。周囲の人々は生来の特性を自閉症者の後天的能力の問題性に転嫁するきらいがあるのだ。このようなことが職場内における疎外を引き起こした要因のひとつになったのだろう。

翻って「障がい者であること」が周囲に知られた場合、自閉症者にとってどのような問題が生じるのだろうか。人間は、物事を認識する際に概念を設定するため「カテゴリー」を非意識的に設定する。その中でも社会的カテゴリーは、「内集団」と「外集団」という区別を生じさせる。内集団の情報を処理するときには、外集団のそれを処理するときよりも肯定的な感情が伴いやすい。加えてそのことが自身の判断や行動に作用することに気付くのは容易ではないため、本人の信条に拘わらず内集団バイアスを生じさせてしまうという。こうして健常者と障がい者のあいだに「心の壁」が生じてしまうのだ。だが、必ずしもこの「心の壁」が直ちに各人の具体的行動として表出するとは限らない。ではそれが実際に行動として現れるのは如何なる原因によるのだろうか。ここでは2018年に起こった「障がい者雇用水増し問題」を皮切りに議論を展開していく。

この問題は、中央官庁及び地方自治体が、企業や公的機関に一定数の障がい者を雇うように義務付ける法律である「障がい者雇用促進法」の規定を無視し、障害者手帳を持たない人までをも障がい者として算出し雇用していたというものである。それによって官庁及び自治体は国民から多くの非難を浴びることとなった。

このような問題が生じる要因として、まず日本社会の「健常者」と呼ばれる人々の中に、何らかの障がいを持つ人々は一般的に、それを持たない人々よりも職務を遂行するにあたり効率的でないというステレオタイプの前提が存在する。人間を「効率性」という杓子定規で評価する姿勢がここにはある。この姿勢がステレオタイプを具体的な差別的行動に転換する力をもつのだ。そしてその差別的行動が、「健常者社会」すなわち健常者が中心となり障がい者たちを疎外する社会を形成するのだ。

この効率性という基準が設けられる背景として、日本の諸企業及び公的機関に一種の「焦り」がある。現代社会において企業は、たとえそれが市場を独占的に支配するような大企業であっても、自社製品と他社製品のあいだに差異を作り出さぬ限り、たちまち経営状態が悪化し倒産する危機に常に直面している。また、公的機関にあたっては、少子高齢化を主要因とする社会保障財源の切迫、消えぬ公債問題など解決すべき財政上の問題を多く抱えている。企業と公的機関とがそれぞれ抱える問題は相異なるが、いずれにおいても「効率性」を基準とせざるを得ない要因が存在するのだ。そしてこの「効率性」という基準を設けることをあえて前景化することで、上述の諸問題を進行させないようにするための、夜警国家的な政策や経営の合理化を正当化しているのだ。このような正当化がなされるとき、上述の「心の壁」が具体的行動として表出するのだ。

5. 犯行の要因——無差別殺傷の心理学

このように障がいの有無によって各人の被雇用形態に差異が出てくる状態では、障がい者は「健常者社会」から疎外されて、社会的な孤立状態に陥る。先の事件の被告は、その社会を紛れもなく構成する他者が、自らを孤立させ不安にさせる「敵」に映った結果、社会への反抗心が駆り立てられ、“無差別に”人々に襲い掛かった。ここにおける「他者」とは、彼との交友間期が刹那的にもあった、あるいは血縁関係が実際にあったような人々のことではない。それは直接的には無関係でありながら、彼によって「健常者社会」を維持しているよう

に認識された匿名の人々のことである。そしてそれは、決して具体的にならない抽象的な「他者」である。その意味では、無差別殺人事件とは、その犯行者による認識上の「差別」が生じた上で成り立っているのだ。

彼は事件後すぐに「社会を恨んでいる。以前から人を殺したい（という）願望があった」と述べている。彼が反抗した社会とは、自分の意思に無関係な、発達障害などの恣意的特性を理由に人間が人間を疎外する〈効率至上主義社会〉だった。この事件は社会の矛盾から生じたのだ。ここに彼が“無差別”殺人事件を起こした核心が存在する。

6. 家族・職場内における孤立とその要因——微視的な省察

ここまではこの事件が生じた背景・要因を、効率性を一辺倒に求める社会に求めてきた。しかしながら、この理解は巨視的なものでしかなく、当事件に関与した人々の心的世界、すなわちこの社会状況がどのように彼らの心理に作用したのかを解明するようなものではない。また、事件の要因をたった一つのものに求める姿勢は、かえって事件を見えなくする、あるいは事件について「理解した」ように誤解させる要因である。そこで本項では、それらの解明を試み、要因を多元化させることで事件の本質をより詳細に理解していきたい。

「俺には生きていく価値がない。」小島一郎被告は事件前に親類にそう告げていた。ここからは、彼の自身の存在に対する無力感、生に対する絶望感が感じられる。そのような「自己喪失の状態」は如何にして形成されたのだろうか。上述の労働市場における社会的孤立状態に加えて、家族内における孤立状態も事件の発生要因の一つになっている。

中学2年の頃、家族内での会話は、些細なことから口論になることが多いためにほとんどなくなり、母親とのいざこざから深夜に両親に対して包丁と金槌を向けたこともあったという。その後、彼の父親は「(彼は) 言葉が通じない」と感じたと話している。事件の前年、母親の提案があって愛知県岡崎市に住む彼の祖母と彼の養子縁組が決まった。このように、彼は自らが「正しい」と思ってとった行動により両親から見放されることになった。それにより、自らの信奉する価値観や周囲の身近な他者に対する基本的信頼が揺らぎ、人の言動に対して疑心暗鬼になった。自閉症者にとって、いや彼らだけでなく人一般にとって、家族あるいはそれに準ずる存在というのは特別で代替不可能なものである。そのような代替不可能な他者に信頼されず疎外された状態では、自身の行動が正しいのかを規定する基準が揺らぐ。

「如何なる理由であっても人を殺してはならない」という命題は、一般的な価値観に照らし合わせると成立するが、このような自己喪失の状態がそれを崩壊させ、犯行に至ったと考えられる。

このような「自己喪失」と「自己の正当性・基本的信頼の揺らぎ」が、彼自身の被害者的観念、すなわち、自分は社会から見放され除け者扱いされた人間だという考えをもつに至った要因だとも考えられる。被害者的観念は、普段我々がもつ「人を殺してはいけない」という暗黙のテーゼの存立基盤をラディカルに否定する構造をもっているように思える。それは、この被害者的観念が「基本的信頼の揺らぎ」から生じていること自体が原因である。その揺らぎは人々のあいだで共通して持たれている（と考えられている）信念を容易に破壊するからだ。このような思考プロセスが怨恨から殺人へのロジックを正当化し、殺人が生まれるのだ。

7. 今後取り組まれるべき障がい者支援制度に対する展望——政策上の問題点から

ここではまず、日本の労働市場においてどのような障がい者支援が政策的に取り組まれているのかについて見ていきたい。21世紀への突入を転換点として、厚生労働省が採る雇用対策の基本方針は「福祉から就労へ」というものであった。そして、その基本方針に沿うように、特定求職者雇用開発助成金制度が始まった。この制度は、障がい者や高齢者、母子家庭の母といった社会的弱者として扱われてきた人々を「就職困難者」と位置付けたうえで、そのような労働者を雇用した事業主に対して助成金を与えるというものである。それによって、そのような「就職困難者」は、就職困難な状況を脱し、健常者と呼ばれる人々、すなわち働き盛りの成年男女と同様に働けることを前提とする。しかしながら、そもそも生来の障がいを有する人々は、これまで見てきた自閉症者のように、生まれつき社会という環境に馴染めないなどの就職後の困難を有するが故に、健常者と同様の仕事に就くための門戸が開かれなくなっていたのだ。そのことを考慮すれば、就職という一つの壁を取り除いて、彼らを一様に通常の利益重視・効率事情主義の労働市場へ投入したところで、健常者と同様の働き方をできない場合があるという問題は解決しない。先にも述べたが、特に自閉症者の障がいは、主に社会という場に出たときに〈顕在化〉するのだ。

そこで、そのような就職後の多くの困難・労苦を軽減し取り除くための施策が求められるが、その考察は今後の自身の研究に委ねるとしたい。しかしながら、就職困難者とりわけ自閉症者における就職後の困難は主に、その特性柄対人的コミュニケーションが必要な場面で生じる。また、自閉症者とりわけアスペルガー症候群を有する人々の中には、周囲に自身が自閉症を有することを知られずに社会生活を営む場合が多い。そのため、求められるべき施策を実現するには、社会という環境に馴染めない人々を、排除するのではなく包摂する環境をまず設ける必要がある。それも自閉症者のように対人的交流を得意とせず自らそれを回避する傾向にある者にさえも寛容な場を、である。そのような環境のもとでは、相模原障害者施設殺傷事件のような、優生思想が前景化した事件が生じる温床さえも生まれてはならない。

また、つぎのような指摘にも注目したい。

「農業労働やケア労働、子育てといった有用であるが経済効率のような基準に照らすと『不効率』とならざるをえない労働領域が存在する。…これらの労働は、…資本蓄積になじまぬかたちをもつからこそ、人間労働のあり方として批判的豊かさを備えている。」(中西、1997、p. 84)

この指摘を参考にすると、効率至上主義をこのような労働領域に導入すること自体が、彼らを包摂する社会あるいはコミュニティの形成を阻害しているのかもしれない。いずれにせよ、この社会に暮らす人々の結合部分におけるゆとり、遊びが必要なことは言を俟たない。

さらに、自閉症児をもつ家族に対する政策的取り組みが欠如しているのも問題である。2013年から、新型出生前診断が始まったが、その導入から3年経った2018年時点で、導入以来検査で異常が確定して妊娠を続けるかどうか選択できた人のうち96.5%にあたる334人が中絶を選択していたという。この診断はお腹の中の子どもがダウン症を有するかを出生前に調べるものであり、このような結果に対して優性思想を助長しているという批判も多い。しかしそれだけでなく、なぜ世の夫婦たちが「中絶」という選択をするのかという問題にも注目す

べきだ。それは、「健全な子どもがほしい」という優生思想的な理由よりも「この子が生まれてもこの社会では生きづらくなってしまうかもしれない」という将来的な漠然とした不安が拭えないという理由の方が強いであろう。やはり、現行の積極的格差是正制度としての障がい者支援制度では不十分なのだ。

8. 犯罪不安社会における刑罰のあり方

日本社会では、凶悪事件が生じた際、犯罪者を社会から一時的に排除することでそれを解決し、事件との対面を回避しようとする。そのため、社会への反抗を掲げる同様の事件が生じて過去の惨事が繰り返されるばかりだ。

また、次のような指摘が生まれるのも、そのような逃避が原因であろう。

「すべての習慣的な社会行動の傾向と同様に、近代処罰の構造は、その存在が不可避であるという認識と、現状が必然的に正当であるという認識を生み出した。当然とされる処罰の仕方が存在することによって、われわれは処罰について深く考える必要性から解放され、わずかに残された思考は、特定の狭く公式化された水路に従うよう誘導される。」(デービッド・ガーランド、2016、p. 3-4)

繰り返すが、日本社会では、事件から目を背け、刑務所という「異世界」あるいは「非社会的空間」へと犯罪者を送り込む（疎外する）ことによって安心感を得ようとする。刑務所から囚人が脱走したときマスメディアのインタビューに対し、早く捕まってほしいと答える人々が多いのはこの証左である。人々は、このように1人あるいは複数人の犯罪者に全責任を転嫁して「加害者—被害者」という二項対立の構図を作り上げようとする。しかしながら、そのような安心感は刹那的であり幻想的なものである。

章の冒頭に述べたように、このような幻想を基にしたうえでの厳罰化は無駄であるどころか、人々の事件への対峙を妨げ同様な惨劇の反復を助長する。このことを考慮すると、我々は「厳罰化」という世論を果たして維持してもいいのだろうか。近代以降の刑罰のあり方を相対化し、長期的視野で見た場合に適切な刑罰のあり方を考えるときがいま来ている。

9. 現代日本社会の展望——結びにかえて

ここまでは、新幹線ナタ殺傷事件が生じた社会的・制度的要因を解明することを皮切りに、自閉症者及びその家族に対する社会的援助の問題点と近現代社会の刑罰のあり方における問題点を見てきた。しかしながら、これらは「自閉症者と犯罪」の関係性を直接結び付けるものではない。すなわち、当事件の被告と似たような境遇にある人々全てが必然性をもって殺意に駆り立てられるわけではない。加えて、「自閉症を有するならば犯罪に走る」という命題を正当化するようなものでも決してない。そのような偏見をもたらす理解のしかたは、歴史的に見ると、あらゆる差別的政策あるいは差別的な社会的対応に繋がっているため非常に危険である。

そのことを考慮した上でもう一度、事件の生じた社会的要因に注目すると、社会的問題には、これまで指摘されてきたものから未だ様相が明確になっていないものまで多くあることがわかる。また、これまで指摘されていたにも拘らず、その具体的な性質が明確に理解され

ていないが故に解決されぬままになっているものもある。このような社会的問題に対峙しない限り、当然のことながらより良い社会を構築することはできない。そのためにも、近年進んでいる厳罰化の傾向など多くの当たり前と考えられていること、正の効果が自明視されていることを批判的に見て相対化し、短期的視点だけでなく中・長期的視点から解決策を考察する必要があるはずだ。

犯罪は社会の様相を反映する鏡であるという、犯罪をある種の手段として見る見方は以前から多くの文献で見られる。しかしながら、犯罪を社会的な逸脱状態・異常行為として見る限りそれは成立しない。その語られ方は非日常的な空間のなかでのものとして犯罪を認識するもの、あたかも異空間で生じた出来事かのようなものであるからだ。犯罪が冒頭の機能を果たすためには、犯罪を現実の社会からいわば必然的に生じた行為として見る必要がある。この事件では、無関係な、いや「健常者—障がい者」という枠組みでのみ被告と関係していた一人の男性の命が失われた。同様な事件が繰り返されぬためには、このような視点を絶えず持ち続けることが我々には必要だ。

【注】

1) サリーとアンの実験

まず次のような場面を被験者に示す。

- ① サリーとアンが部屋で一緒に遊んでいる。
- ② サリーはパンを、かごの中に入れて出ていく。
- ③ サリーが部屋の中にいない間に、アンがパンをかごとは別の箱に入れる。
- ④ サリーが部屋に戻ってくる。

そして「パンを取り出そうとしたサリーはかごと箱のどちらから先に探すか。」と被験者に問いかける。正解は「かご」であるが、心の理論の発達が遅れていれば他者が誤信念をもつことが理解できていないために「箱」と回答してしまう。

2) ジョンとメアリーの実験

まず次のような場面を被験者に示す。

- ① メアリーとジョンは公園でアイスクリームを売る自動車を見た。
- ② メアリーはお金を取りに家へ帰り、その間にジョンはアイスクリームを売る自動車が公園から離れた教会に移動していくのを見た。
- ③ メアリーは家から公園に戻る途中に偶然教会でアイスクリームを売る自動車を見た。
- ④ 公園と教会の中間地点にいたジョンは、アイスクリームを買おうとしているメアリーを探し始めた。

そして「ジョンはメアリーを探しにどこへ向かうでしょうか。」と被験者に問いかける。正解は「公園」だが、心の理論の発達が遅れている場合、上と同様の理由で「教会」と回答してしまう。

【参考文献】

朝日新聞 2018年6月14日付朝刊『「社会を恨んでいる」供述 容疑者、殺人「願望」』。
朝日新聞デジタル 2018年6月29日付記事『「何も考えずに済む刑務所入りたくて」
新幹線殺傷容疑者』。

<https://www.asahi.com/articles/ASL6X3SQYL6XULOB006.html>

最終アクセス：2019/6/18

池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子（編）（2019）『補訂版 社会心理学』有斐閣。

岩田正美（2008）『社会的排除』有斐閣。

NHK スペシャル取材班（2010）『無縁社会』文春文庫。

河合幹雄（2004）『安全神話崩壊のパラドックス—治安の法社会学』岩波書店。

中日新聞 2018年6月12日付朝刊第33面『容疑者 自殺・刑務所に關心』。

デービッド・ガーランド（2016）『処罰と近代社会』現代人文社。

デジタル毎日 2016年4月25日付『新型出生前診断 異常判明の96%中絶 利用拡大』。

<https://mainichi.jp/articles/20160425/k00/00m/040/119000c>

最終アクセス：2019/6/18

土井隆義（2010）『人間失格？「罪」を犯した少年と社会をつなぐ』日本図書センター。

中西新太郎（1997）「第1部 90年代日本社会の再編成と生活問題」渡辺治・後藤道夫（編）

『講座 現代日本3 日本社会の再編成と矛盾』大月書店。

中根晃（編）（2000）『自閉症』日本評論社。

野尻英一・高瀬堅吉・松本卓也（編）（2019）『〈自閉症学〉のすすめ』ミネルヴァ書房。

原田隆之（2014）『入門 犯罪心理学』ちくま新書。